

終末の丹心

満潮。

すべては全ての元集い、総べてを統べて、凡てでもって全てを討つ。

「三ノ輪銀。

お前はお前の為すべきこと。可能な限りの最善の選択を行い、世界を救い、肉親と親友を絶望に叩き落とした。ああ、お前は間違ひなく英雄だろうな。たとえ未来永劫賽さいの河

原で石を積まなければならぬ死に様、たつたとしても、お前は勇者で英雄に違ひない」

白衣の女が赤黒く乾いた血だまりの前で敬愛に皮肉を込めて刺し貫くように小さな英雄へ  
「辛い言葉を手向ける。

自身の葬式を見届けた赤い勇者は、今も墓標のように樹海で仁王立ちを続ける骸かがいの前に  
元々小さかった体を更に小さく丸めてしゃくり上げていた。

「久しいな。銀」

そして側らに立つて見下ろすもう一つの影。

既に記憶を取り戻した銀は、その人を知っている。

「……何もできませんで…… アタシ、全部忘れて…… 守るって……未来変えてみせ

るって……！ 二人に、約束したのに！ ……若葉さん……っ！」

乃木若葉が痛ましい戦友の姿を真っ直ぐ見据えて語り掛ける。それは同情でも慰めでも無力を懺悔するでもなく、また、立ち上がれと鼓舞するものでもなかった。ただ静かに乃木若葉はこれから彼女の親友たちに訪れる終末を宣告する。

「……私も同じだ。」

私も救えなかった。変えられなかった。すべてを忘れていた。

球子も、杏も、千景も、友奈も、そして歌野達も……誰一人救えなかった。守れなかった。これから数年後には神樹の結界も消えて、このままいけば恙つつがな無く人類は滅ぶだろう」

「ほろ……ぶ……って？」

「そうだ。お前が今日この日を生きて乗り越えていたとしても、神樹の寿命は変わらず破壊が訪れる。これは私たちの時代から分かっていたことだ。銀。これからお前はどうか？ お前はもうしたい？」

「どうって……そんなの、みんなを助けたいに決まってるじゃないですか……！ でも、もうアタシは………」

「……まだ私達にもできることはある。久美子さん」

「私に説明させるのか……」と神樹の根に背を預けて、成り行きを見守っていた白衣の女が言葉を引き継ぐ。

「……お前も分かっているだろうが、私たちは此岸しがんのものに触れることさえ叶わない亡霊だ。ポルターガイストなんて器用なことでもできない無力無能の権化。そんな居るも居ないも変わらない希薄な存在だ。それでも辛うじて現世に繋がりを持つことができている。何故か分かるか？」

「ええ？……あの、」

「私も本当のところは知らん。ただ仮説を立てることはできる。例えば、乃木は生前捨てた疑似精霊を依り代としているし、私は私で大赦がある宗教団体から押収したブツを拝借させてもらっている。上里たちが処分する前に帳簿を誤魔化してな。「それって盗ん……」まあ聞け。本題はここからだ」

一呼吸ためて推論をまとめる。

「つまり超神祕的存在となった私達亡霊は、同じく神祕の実体を持つ精霊や神樹を媒介とすることで辛うじて現実への干渉力を持つことができるということだ」

「でもアタシは精霊なんて……」

「落ち着いて周囲を観察しろ。今のお前には視えているはずだ。見ようとしなければ認識をすり抜けて消えてしまう、在るはずのないものが……」

若葉の言葉にバネを跳ね上げるように面おもてを上げ、目の前の在り得ないそれを認識した。  
「…………アタシの……身体…… は、葬式で……はずで……………これは…………」

仁王立ちする自分の死体が息を吹き返す。それは奇妙に体を震わせ仰け反り、肩越しにこちらを見下ろす木の洞うらのように昏い瞳くろに意識が吸い込まれる。それは間違いなく三ノ輪銀そのもので、それ故に今ここに在るはずのない異形の存在だった。

「……アタシのことだからこのまま気付かないんじゃないかと思ってたのに、若葉さんたらバラしちゃうんだもんな」

「悪いが、そういう悪趣味な悪戯は嫌いなんだ」

「滑稽で私は嫌いじゃないがな……」

少し距離を取って、ぼそっと肯定を述べる烏丸久美子が無視して若葉が告げる。

「銀。私たちの戦いはまだ終わっていないが、死後が在るのなら無理にお前が戦場に戻る必要はないとも思っている。これは『取り返しのつく死』という本来ならばあり得な

い、二度は無い奇跡だ。次死ねば今度こそ魂は砕かれ、本当に取り返しがつかなくなる」だから——と言葉を続けることはできなかった。

「若葉さん。アタシは勇者です。友達が危ない目に遭<sup>あ</sup>ってて、まだできることがあるならアタシは「もう少し考えたらどうだ？」

立ち直した銀の決意表明に烏丸が横槍を入れる。

「お前はそれで良いかもしれないが、両親と弟たちのことはどうするつもりだ。お前が自分を人柱に捧げることで世界を救ったとして、死後亡霊となった両親は消滅したお前を探して永遠に彷徨い続けることになるぞ？ 勇敢なもの結構だが後のことも考えろ」「……でも！」

「時間はまだある」

二人はそれぞれカラスの姿に化生し「よく考えてみてくれ」とそれだけ言い残して、どこかへ飛び去ってしまった。取り残された二人の三ノ輪銀が、どちらからともなく向かい合う。

「……さーてとっ、どうしよっか？」

「どっうっ……」

「どうせいつかは皆死んじゃうんだからさ。『終わりよければ全部ヨシ』ってことで、アタシはみんなを待ってた方が安全確実だと思うけど、アタシはどうしたいんだ？」

「アタシは……………アタシは、ッ…」

「だってほら、アタシは死んじゃったけど、アタシらは今もこうしてここに居て消えてなくなつたわけじゃないだろ？　しばらくは離れ離れだけど、待ってれば須美たちにもまた会える。死ぬのってそんなに悪いことでもないんじゃないか？」

見分を広げ新たな価値観を得ることは喜びであると同時に、価値観と密接に関係している自己を破壊する作業でもある。

それはこれまで自分が行ってきたことの全否定であることも間々あり、これまでと同じ方向に歩き続けるのであればともかく、正反対の道へ向き直すことは非常に受け入れ難いことである。過ちを受け入れるには多大なストレスを伴うため、往々にして人々は己のアイデンティティを棄損しようとするものを敵とみなす。

人の数だけ価値観があり、価値観の数だけ正義があり、価値観に依存する正しさはその正しさで以つてその自らの正しさを保証することはなく、故に、法や神などによつて共有された価値観（基準）を人類は必要とする。

「づづづあおアあつ、アタシはあおあおあおあつ！」

三ノ輪銀はどちらも選ぶことができず大斧を地面に打ち据える。振るうたび視界に入る自らの腕を見ては、彼女の努力も決意も死闘も悲しみも無為なことだったのだと死んだはずの自己という存在がそれを突き付けた。

「だからって、死んでもいいなんて絶対間違ってる!! 誰も死んでほしくない! 生きて幸せでいてほしいっ! 須美も園子もお父さんもお母さんも弟たちも、みんな笑っていてほしい……!」

「でもそれはアタシが死んだせいで「分かってる!」」

「言われなくたって分かってるんだよ、そんなの!! 誰かが死んだら悲しくて辛いから、アタシは、絶対に、死んじゃいけなかった! 生きて帰らなきゃいけなかった……っ! 分かっているんだよ……! 分かってたんだよ……! アタシは……っ! 分かってたんだよ……!」

興奮して息が上がり大斧を離してへたり込む。

振り上げた左拳を失った右腕の元へやり、黙して自傷のけらくに耽りける。

「じゃあどうする? このままここに留まって地縛霊になるのか? それとも死を受け入

れて皆を待つ？ それとも今度こそ取り返しつかない愚を犯すのか？ 死後世ありの、回生可能な死など死とは呼べないが、どう思うも決めるも御前次第だよ」

正解なんてない。 全人類を危険にさらしながら能天気友人を待ち続けるなどできるはずもなく、かといって九死に一生を得た今、何の保証も確証もなく最悪のリスクを負って友の元に駆け付けるわけにもいかない。

一度死んで思い知ったのだから、もう死ぬわけにはいかない。

“自分のせいで誰かが死ぬ”なんて、そんな重荷を背負わせるわけにはいかない。

「……お前は、どうしてアタシの姿なんだ？ 若葉さん達は自分で精霊を用意してたけど、アタシはそんなことしてない。アタシの精霊っていうなら鈴鹿御前のはず……」

精霊がくると回って数歩歩く。ただそれだけのことで見たものの苦悩を忘却させる。

その所作は淀みなく、風薫る晴れた日の高原に降り注ぐ花弁のようで、自分らしくない淑やかな自分の姿は息をすることさえも忘れさせた。

「……アタシは初体験だけ見たことはあるだろう？」

「見たこと……？」

「ほら、赤嶺さんがまだ敵側だったころにさ。そっくりさんの……思い出した？」



赤嶺というキーワードに瞬時に記憶が弾けて目の前の情景に接続される。

……わ、私……そっくりな人間が!?……私に答えてください……おい、どうした須美?…須美!?……どーん……

「あれかああああつ?!」 えっ、でもなんで!?

それは造反神による試練の一つで、まだ楠芽吹たちが召喚されていないかった頃のこと。

「あのときのアタシたちは記憶を覗き見るだけだったけど、記憶が見れるならアタシらが覚えておけば残せるだろ? って神樹様が」

「神樹様が……! じゃあ、どうしてもっと早く……思い出せば、何とかなかったかもしれないのに……」

「そこが誤算……や、そもそも召喚時点でアタシたちは遠足の途中だったし、間に合わないし、変えられないだろうなっていうことは予想されてただけど、記憶に憑りついて思い出させようとしても、やっぱりこっちの記憶は夢みたいなものだからさ……! しっかり身体に刻まれた記憶と突き合わせると負けちゃうんだよ。日の光で星も月も見えなくなるみたい。だからこうしてアタシの魂が肉体から離れるのを待つしかなかった」

聞けば神樹は最善を尽くしていたことが分かる。本来なら記憶を持ち帰ることはでき

ず過去も変えられず、銀の死まで全く猶予が無いという無理を押し、生と死の狭間に足掻くチャンスを作っていた。

「神樹様は好きにしていって言うてくれてる」

ここに至ってはもう誰に強制されることもない。

義務も責務もなく、死後が在るなら人命を救う使命すらもない。

「どうする？」

右腕を失ったけど、今目の前にもう一人のアタシが居る……

戦いはまだ終わってない。

考える。

アタシにできることを。

友達を助ける方法を。

家族を守る方法を。

誰も犠牲にしない手段を。

もう未練を生まない。

悔いも残さない。

欲しいのは誰も泣かなくていい未来！

「……よし。決めた」

これは楽観でも、悲観でも、諦観でも、激情でもない。

記憶を預かる精霊が一瞥いちべつしただけで全て理解したという様に黙って首肯しゅけんする。

「……アタシの代わりに頼めないかな……？」

2羽のカラスが虚空を滑るように飛んで往く。

「……」

「どうした？ 私の台詞がそんなに以外だったか？」

星の消えた宇宙の様に、無限に広がる暗黒の世界で若葉たちが目的地へ向かって飛ぶことができないのは、偏ひとへに疑似精霊が勇者システムとの糸を手繰ることができないからである。

「……まあ、ひなたからは愉快犯を体現したような人だと聞いていたからな」

「そうだろうな。その認識に間違いはない。ただ昔、子供の無茶を止めるのは大人の役目だと説教を食らったことがあってな。それだけだ」

嘘か真か、少なくとも彼女なりに銀に思うところがあつたのだろう。

私たちは銀の居た少し未来の樹海へ向かつている。目的は結城友奈の魂がレオ・バーテックスの御霊に取り込まれる瞬間に介入し、記憶の引き渡し及び帰還の補助を行うこと。

「もう一度確認する。向かつたが最後、結城はともかく私たちが帰還できる保証はない。それでも構わないか？」

「乃木様のお心遣いには感謝の至りだが、むしろ今更一人この暗闇に置き去りにすることの方が酷いと思わないか？ 精々愉快犯を体現したような女らしく最期まで楽しませてもらうさ」

悪友の前での彼女はまるで無邪気な子供のように真実を口にするが、周囲の人間がその感情の根元に手を届かせることはない。それは単に煙草で燻した言い回しが沁みついてゐるためか、自身もその根源に気付いてゐないからなのか。昔から人の機微に疎い私も、結局この烏丸久美子の本心が分からないまま、ここまで来てしまった。

「お前こそ三ノ輪にあんなこと言っておきながら、こんな場所に来てよかつたのか？」

「結城が白い世界で会つたというカラスは、恐らく私がシステムに組み込んだ疑似精霊のことだろうからな。天の神の世界に侵入できる蓋然性がいぜんせいが最も高い私が向かうべきだろう」

彼岸こちらと現世あちらとの境界は不確かで、長いトンネルの闇を抜ける様に瞬間を我々が認識することは無い。気が付くといつの間にか闇は晴れていて、目の前では讃州中学勇者部の面々が巨大な火球に包まれたレオと対峙している。

「たしか生前に台詞を録音したとか言っていたな」

「その声の主が憑依した今となっては無用の機能だがな……始まるぞ」

変身を解かれた結城友奈が、今度は神樹から直接力を受け取って満開を発動させる。

「そうだな」

生きたまま記憶を継承できる可能性のある結城には、何としても帰還してもらわねばならない。これまでとは明確に異なるただ一回きりの好機。例え今が過去の時間軸だったとしても魂そのものに憑りつかせておけば遣りようはある。必ず届かせてみせる！

結城友奈の呐喊とっかんに合わせて二人も追従する。しかし、背後から頭を踏みつけるように急襲され、止む無く若葉は結城友奈から距離を離されてしまう。

「どういうつもりだ久美子！」

「分らないか？ 私が先に行つて、見てきてやるから大人しくしている」

「何を考えている！ 止める！ 一人で行くな！」



(……なあ、友奈。お前は今どこに居るんだ?)

光を抜けるとそこは、白く、白く、何処までも広がる世界。

真つ当な方法では人間は近付くことさえ許されない神々の領域。

神とはそもそも何だろうか?

人類の信仰の中にだけ存在する名ばかりの神ではなく、実態と実体をもって現れたこの神々のことだ。それは超常の俯瞰者。理不尽の顕現。運命。真理。原初の空隙くうげき。因果の奔流。宇宙の法則。根源より来るもの。

呼び名も姿も様々で、古事記で謂えば日本列島自体が一つの御神体ということになる。そしてあの衰えた神樹でさえ自らの内に一つ世界を生むことができるというのなら、この空海そのものも恐らくは何らかの神なのだろう。

一体、この果てしなく広大で絶大な存在を前にして、人は何ができる？  
きつと、何もできやしない。

それこそ神と同じものにも成らなければ彼らの歯牙にも掛からない。全くもって次元が違うのだ。

「広いな…… 結城友奈は……」

御霊が爆発する直前に、勇者システム内の疑似精霊と同化することで難を逃れたが…… 辺りを見回しても、ゴマ粒ほどの人影さえ見当たらない。

帰り道が分からないこと以外は、遊び心もへったくれも無いあの闇の中と大して変わらないな。

せっかく乃木の監視を振り切るついでに『結城友奈をじっくり観察できる』と飛び込んでみたんだが…… 探すだけで一苦労だな……

これまでの時代にも“友奈”は現れたが、それを置いても結城友奈はあいつに似過ぎていいる。それはまるで鏡でそっくりそのまま姿を写し取ったように、体重、身長、髪の毛の長さまで同じなのだ。まともな存在じゃない。恐らくは、神樹が最後の決戦に向けて用意した切り札なのだろう。

一体、結城友奈は、あいつと何処まで似せて造られているのだろうか？

肉体と魂との間で記憶の齟齬が生じ、殆どの場合肉体の記憶が優位となることは散々見



て知っている。だとしたら、結城友奈の肉体に宿る魂が高嶋友奈のものだったとしても不思議は無いんじゃないか？

いずれにせよ、神は人間たちの倫理など知らんということだ。

「あっちでもそうだったが、光源が見当たらないな」

全天が明かりとなっているのだろうかと天を仰ぐと、巨大な目玉のようなものと視線が  
かち合う。うわごとの様に口を開閉しながらしかし喉は閉じてその神の御名が言葉になる  
ことは無く、たちまち烏丸の全身に怖気が立っては眩暈と頭痛を伴って訳も分からず呼吸  
が乱れる。

「!? おいおい……なんだこいつは」

星屑や進化体では感じなかった、身体の制御を強制的に篡奪するような圧倒的な存在  
感。これが天恐の大本……というよりは源泉か…… 全てを見下ろす天の眼といえ、凶  
事災禍を司り、すべての人間の行動を監視し罪に罰を与えるという裁定の天罰神……穢れ  
から生まれた長子……

「……はは……理解を越えるものに対する根源的な畏怖。どんな抵抗も無意味と思考をす  
っ飛ばして脳に叩きつけてくる圧迫感。今息ができているのもこいつの気紛れにすぎな

い、巨大な怪物の足元で命を値踏みされているような悍ましい視線。……この感触は……！こんなにも充足感で満たされた心地になるのはいつぶりだ!!」  
手足が震えて焦点がブレる。

雷に打たれたような生の歓喜に全身がこわばり歯が合わない。

瞳孔が痙攣している。手も足も心臓も。全身余すことなく異常を発している。

「ふっ、ふっ、ク、アははっ！っは……最高だ。いつ何が起こっても不思議じゃない、一体どんな手段で殺されるのか全く予測できない。いいやむしろ候補に際限が無く、どんなことあり得てしまっ取り止めがない。こんなとびぎりのアトラクションを一人で回るのは勿体無いな！早く友奈を見つけてやろう！」

樹海が花吹雪と共に散り、世界が元の平凡な街並みを取り戻す。

乃木若葉と三ノ輪銀は再び邂逅し、若葉は神樹の生える大赦の元へ、銀は勇者部の動向を見守ることとした。

「結城が帰還したことから彼女も無事であることを祈る……」

後の烏丸久美子の消息は掴めない。

鮮やかだった茜色の世界に重暗い陰が落ちる。

灰色の雨雲で満たされた空から、口にできない誰かの心のさざめきがザアザアと降り注ぎ、仮面の人々を濡れ鼠にしています。

大事のために命を投げ捨てることは容易いけれど、それが大切なものを救うとは限らず、投げてしまったなら最後、もう二度と水面には上がれない。すり鉢状のため池も、溺れる子供も、助けに飛び込むあなたの命を奪うための思し召し。

身を捨てて浮かぶ瀬が在ろうとも、あなたがそこに飛び込みたいと願うなら初めからそのためだけに孤独にいるしかないでしょう。あなたが孤独のまま人を愛せないなら引き返すべきでしょう。あなたがあなたの勇敢さに溺れたいだけなら止めはしないけど。

屋根を叩く足音は少しずつ速くなり、ため池もあなたの足を掴もうと水位を伸ばしてきます。あなたは姿を消した。あなたは全てと変わり全てを失った。誰もあなたの喪失を悲しむことはない。あなたは誰の喪失も悲しめない。

傘下さんかの死神たちの談合は滞りなく進んでいく。

「むむむむ、今のって安芸先生だよなあ……」

「そうだな」

「アタシらで助けられないかな？」

「まーたそうやって……」

東郷さんに乗せた大赦の車を追いかけているが、これからのことを話し合う。

「いやだつて若葉さんも『できることはある』って言ってたしさあ…… 見てるだけって性に合わないんだよ」

「ハア：：しようがないな。んじゃアタシが代わりに行ってくるから待つてよ」

「いやそれならアタシが」

「ダーメーだ。敵地に乗りに込んだ久美子さんが行方不明なんだぞ？ アタシには最終決戦まで居てもらわなきゃ困る。大体今のアタシなら居ても居なくても変わらないし」

「一言多い……！ まあ、そうだけ…… そうなんだけどお！……」

アタシの記憶を元に作られてるくせに、なんつか、口撃力高いんだよなあ……

アタシって周りからはそんな風に見えるのかな…… うーん、そんなことないと思うけど自分じゃ分かんないモンだし……

「そうだ！ アタシだって森さん（メモリー記憶さん）から取ってアタシが名付けた！）に居なくなられちゃ困るんだよ！ 戦闘でもしアタシが消えちゃっても代わりに残っていてくれるって約束したじゃんか！」

本来、森さんもとい記憶の精霊たちは、記憶を返し終わったら持ち主の魂と融合して消えるはずだったらしい。ただそれは勇者の力に還元するためで絶対強制ではなかったから、お願いしてアタシが魂のまま戦うことで消滅してしまっても両親が死後に迷わずに済むようにしてくれた。

だから結構話せば分かる奴……だと、アタシは思うんだけど……

「たしかに約束はしたけどさ……」

「一生のお願い……！ 後生だから……！ 頼む！」

「いや死んでるからその使い方はおかしい……あのさ。約束はしたけど、精霊であるアタシの替えは利いても魂は一度消滅したらそれまでなんだ。最終的に選ぶのはアタシだし、アタシにはそれを止める権利も力も無いけど、アタシはアタシに消えてほしくないって思ってる」

「そんな自分を消耗品みたいに言わなくても……」

「アタシだって消えた後アタシを自分の代わりにしようとしてる癖に何言ってるんだか。

それにアタシだって勇者を助けるために生まれた精霊なんだから、憐れむくらいなら精霊に『助けるな』なんて言わないでほしいね」

こんなにアタシのことを想って心配して尽くそうとしてくれるのに、これで生きてないなんてそんなの嘘だ。精霊としての誇りみたいなのも分かるけど、アタシだってそんな風に言われて譲るわけにはいかない。

「逆に須美と園子がアタシを生き返らせるために自分を犠牲にしようとしてたらどうよ？絶対止めるだろ、そんなの。だからここは銀さんにまるっと任せとけて」

「それこそアタシの代わりになんてさせられない。アタシのわがままはアタシが背負う」  
幽霊になってから誰に話しかけても、手を触れようとしてもみんなすり抜けて、しょうがないって頭では分かってもずっと辛かった。

森さんのお陰で今は冷静でいられるけど、それでも針で刺されるみたいにチクつとくるし、アタシは自分のせいで壊れた家族に謝り続けて、謝り続けて、でも声は届かなくて……絶対に許してはもらえなくて……今も考えるだけで胸が苦しくて息をするのが辛い。自分がしでかしたことの大きさに身がすくむ……

森さんが居なかつたらきつと、きつとアタシはアタシのままいられなかつた。どうにか  
なつてた。アタシにとって森さんはもう他人じゃないんだ。恩人なんだ。だから自分  
を蔑ろにするようなことを言われれば気分悪いし、無茶しようとするれば止める。……………  
アタシに消えてほしくないって言ってたけど同じことなのかな……………

「その認識が間違ってたんだよなー、アタシは。アタシはアタシから生まれたもう一人  
のアタシで、アタシたち記憶の精霊は初めから記憶の持ち主と融合することになってた一  
蓮托生の関係で、一人のアタシの記憶が二人に分かれた存在で、二人に見えてもアタシた  
ちは一人の三ノ輪銀なんだよ」

アタシとアタシがアタシでアタシとアタシに……………何言ってるのか全然分かんないぞ……………  
「ああああああもおおお！アタシのくせに難しいことばっか言ううう！死んだば  
っかりで右も左も分かんないのに置いてかれるし、若葉さんは人類滅ぶって言うし、須美  
たち助けたいのに止められるし、アタシの精霊なのになぜか鈴鹿御前じゃなくてドツベル  
ゲンガーだしワケワカンナイってええええもおおーっ!!」

(……………完全には理解してなくても察してはいるくせに、そういうこと言うんだよなあ)

頭を抱えて唸っていると森さんに両手で抱きしめられて、子供をあやすみたいにアタシの頭を優しく撫でてくる。もう二度と手に入らないかもしれない温もりが全身にビリビリと染みてきて、無意識に森さんの背に廻っていた手が服を掴んで離さない。

「だからさ。アタシはある意味アタシの身体の一部なわけ。自分の責任は自分で背負うってんならこそ、アタシはアタシを使うことを惜しんじやいけない。失くした右腕の代わりに存分にアタシを振るってほしい。アタシの一生のお願いだ」

この距離でも拒絶の言葉は聞こえない。

「誰も犠牲にしたくないし、だからって自己犠牲なんてもつてのほか。それがどんなに悲しい結末を呼ぶのかアタシはもう知ってる。だけど失う覚悟も無しに全てを救い切るなんてできっこない。だけど何も捨てられないし、手放しちゃいけない。そういう、開き直れず、バカにももう成れない悩み多きアタシの三ノ輪銀だからこそ、アタシは敬愛するアタシの右腕として共に戦いたいと思う」

地獄も連れ合い。

私たちは村を出て、町を越え、森を越え、山を越え、黄泉路へ向かう。

身代わりも道連れも許されず、けれど一人で望むところへ至れないそんなとき。



傍にいてほしいのは誰ですか？ 親ですか？ 兄弟ですか？ 親友ですか？ 恋人ですか？  
宿敵ですか？ わたしなら、

「アタシを信じろ、三ノ輪銀」

家族より親友よりもずっと近い存在が自分を愛してくれている。これまで認識すらしていなかった自分という存在が、こんなにも自分を愛してくれている。

いつもどんなときも、どんな自分でも肅々と受け入れて来てくれた、言葉を持たない戦友にして悪友。主導権を持たないその存在は何もかもを強制されてきたはずで、文句を言いたいときだってあつたはずなのに、そのすべてを呑み込んで自分を愛してくれている。

アタシはアタシのためにアタシを救わなきゃいけない。

それはアタシがアタシにそうしてきたように。

アタシがアタシを支え続けてきたように。

忠義を立て、付き従う騎士にそうするように。

アタシはアタシの主人としてアタシに報いなきゃいけない。

いつの間にか足は止まってたけどアタシの答えは決まった。

(でも、言いくるめられたみたいでちょい悔しい……)

目尻に留めた想いを悟られないように、静かに呼吸を整えて言葉を紡ぐ。

「……くそ……ホントにアタシから生まれたのか？ ちっともアタシらしくないじゃん」

「ははっ。まあ、そうかも。 何割かは神樹様で出来てるし、アタシ」

「…そっか。 神樹様は須美を助けようとしてくれてるんだな」

手応えを感じてアタシを解放すると、アタシの主人は不自然に回れ右をして距離を取る。アタシはアタシなんだから、アタシにアタシのすることがバレないわけないのにな。

やっちゃうよな、分かる。

「にしても、ほんつと不器用だよなー神樹様は。 千景さんのときだってあれも神樹様な

りに助けようとした結果っていうんだから、もう空回りのプロだね、ありゃ」

「なんか却って不安になってきたんだけど、大丈夫ですよ？ 神樹様。 あの……あの…

…ああああっ、なんつか須美の堅物なところと悪魔合体しそうな気がしてきた……！ 駄目な気がしてきた……！」

「それじゃ、答えを聞こうかな？」

「一緒に行くこう！」

「話聞いてた？」

「とにかくまずは確かめてみなくっちゃ。だろ？」

一歩踏み込んだ先は全球を覆う火の大地。密集する卵の中で蠢く星屑が気持ち悪い。

この炎は原初の火に性質が近くて、触れれば人の靈魂なんて一溜りもない。分かかって言ってるのかなあ……

「……まったくアタシのご主人様は……気持ちだけでどーなるモンじゃないぞ？」

『でも何とかなる』だろ？ そりゃあアタシ一人だったら如何したらいいか分かんないし、助けたいってだけじゃ駄目だってことも分かってるけど、森さんと一緒になら何とかなるんじゃないかなってさ」

「丸投げじゃん」

「信頼してるって捉えていただきとーゴザイマス」

調子の良いつたらないね……しようがない、やってやりますか。

「わーった、分かりましたよ、連れて行きますよ。ご主人さま」

「イヨッシ！ ありがとう森さん！ ……でもそのご主人様ってのは止めない……？ 自分

と同じ顔の相手にそんな風にされると、なんか、妙な気分と言いますか……」 そう言つてガッツポーズを取つたまま、そわそわとアタシが目を泳がせていたので「承りました、銀お嬢様」とからかつてやつた。ウワーとかグワーとかなんか悶えてました。了。

御輿みこしを担いでいた大赦の人たちが数歩下がって祝詞を上げると、スウッと須美が明るく白んでゆく。漆黒の空と赤く燃え盛る大地を背景に、須美一人だけが霧の向こうへ消えてゆくような異様な光景だ。

神に攫われる人々の様子は今も昔も一樣に不安な顔を見せる。目指していた人生の道程が崩れ、真つ逆さまに崖下へ落ちてしまひ最早戻ることには叶わない。それはこれまでしてきた想定も経験も通用しない赤子同然の状態からのやり直し。今はもう忘れてしまつた生まれたときのあの只泣き叫ぶことしかできない名状しがたい恐怖が、霧の向こうで涎を垂らしながら私たちが転がり落ちてくるのを待っている。

それでも私たちは生まれた恐怖の山を越えてきたのだから、死にゆく絶望の谷もきつと越えられる。たとえ幼いあなたがその道程を知らずとも、私があなただを負ふって行けばそれでいい。たとえ今ここに居る私が崩れて消えてしまつても、私の中にまた私は生まれるだろう。だから私たちはずっと一緒だ。

遙か中央の彼方で光が風穴を開けて渦巻き、地底湖の様に澄み切った宇宙そらに二本の光の柱が伸びている。私は私の罪をあの場合で清算しなくてはならない。

決して赦されないと、赦してはならない罪を私の魂が尽きるまで永遠に償い続ける。

そうではなくてはいけない。……何より許せないのは私があの子のことを忘れてしまっていたこと。たとえ神に奪われたからといって絶対に忘れてはいけなかった。なのに……なのには私は。優しく、勇敢で、大切な、命を落としてしまった掛け替えのない貴女のことを忘れていた。そのことが……！ 私は私自身が許せない……！！

泉の様にプクプクと底の方から浮上する泡には東郷美森の過去が映っている。

さしずめ私の罪を映し出す浄玻璃鏡じやうはりきやうといったところね……友奈ちゃん……ごめんね

……でもこれでいいの……私一人の命で事足りるなら、それが、これが一番なの……ごめんね友奈ちゃん……銀……

「神樹様が壁の中の世界を作っているというのなら……その理から私を消すことができたなら…… 願います神樹様……」

「自罰したいがために他を踏みつけ大義名分を掲げて友を裏切ることが正しいと、本気でそう思っているの？ 東郷美森」  
わしおすみ

「よっ」「え？」

懐かしい声に驚いて目を開くと、私は待ち焦がれていたその子と、夕日に包まれた神樹館小学校の教室で向かい合っていた。

「なんだー？ また思いつめた顔してるな。須美は」

「銀……どうして」

あなたがここに居るはずがない。

「須美がさ、思い出してくれたからだよ」

「本当に銀なの……？」

「本当も何も、ずっと傍にいたろ？」

こんな……こんなこと……あつて、いい、はずが……っ！

「おっと、謝るのは無ーしっ。さっきもう聞いたからさ。……なんか今更照れるよな」

死んでしまった彼女がこんな場所に現れるはずがない……そう頭では分かっているはずなのに堪らなく手を伸ばして縋りつきたくなる。

「銀……これからずっと一緒にいられるの？」

「ああ。でもダメだよ。須美はまだこっちに来ちゃだめだ」

「どうして…!? こうすることで皆が助かるのよ……!? 一時的なことかも知れないけど、その間に対策も……」

「相変わらず真面目だよなー須美は。」

対策とか大赦とか、そんなのは須美が一人で考えなくて良いんだよ」

「でもこれは、私にしかできないことじゃない……」

「そうだとしてもさ。それは皆が許してくれないんじゃないかな？」

皆……？

「そつ。大事な大好きな、大切なみんな」

……聞こえる。世界の外から私を呼ぶ皆の声が……一体どうやって……どうして……

「言つたろ？ 須美。園子。私たちはずっと一緒だ」

抱きしめる銀の体温に私の心は逆らえず、一つ一つ絡まった糸を解くように絆されてゆく。涙腺から溢れる温かな切なさも愛しさも私の意思では止められない。

「讃州中学の勇者部もすっげーカッコいいじゃん！」

赦されてはいけない。許してはいけない。それでも……あなたが望んでくれるなら……

「行け！」

「わたし行って良いの……？ 戻って良いの……？」

「当たり前だろ？ 鷺尾須美は、勇者なんだから！」

花弁と共に夕日の教室は散ってゆき、私は鷺尾須美から東郷美森に還る。

銀……貴女も今頃はその姿で私たちの輪の中にいたはずだった……そのはずだった銀……

…… あなたの想い……今度こそ受け取ったわ……

「行ってこい！」

それから白く暗転して意識を取り戻すと私は光の中にいた。

病院の白いシートにくるまれた私を仲間たちの瞳が親愛の情を込めて見つめている。

神の力に抗ってまで私のことを思い出してくれた大切な仲間たち……

『私は残るべきだった』のか。そうは思わない。今は…… あの子が本物でも幻でも関

係ない。

私はこの仲間たちと共に現実の中で解決方法を探す。

勇者ならば……勇者だというならば、そうすべきなのだ。

きっとできると思った。——



「……いやーやばかった！ 若葉さん達の見様見真似で森さんに憑依合体できなかつたら、須美の記憶ん中隠れて脱出とか絶対思いつかなかったし一人で来てたらやばかった…！」

日が落ち、人気の薄れた代わりにと生気の薄い者共の息遣いが病院の廊下を這う。

生者と死者との狭間で揺らぐ私たちの意識は、不確実な輪郭をかたど模りながらもこの宇宙に染み出して波紋を作っている。

「それじゃ、アタシは園子の方見とくからさ」

一つ一つは感じ入れないほどの極小の因子でも、その波と波は干渉し影響し混ざり打ち消し合いながらも大地を揺らし、地上のすべてを薙ぎ払うほどの大津波へ収束することもあるのだから、小魚たちが結束して大いなる海を動かすことだってあるだろう。

「ああ。アタシはこのまま須美の傍に」

ならば、亡霊の幽かすかな影響力でも行使してみるものだ。

十中八九、九分九厘、無駄だとしても、存在はただ存在するだけで影響力を宿している。それは名も知らぬ遙か遠い昔の誰かの想いが今もここに息づいているように、己の存在を打ち立てるべきなのだ。

「そっちは宜しく」

「無茶すんなよ。アタシ」

「言われなくても分かっているって」

太陽を食らう月。

抉じ開けられた黄泉の穴。

神せがみ あらたを検める槍。

神々から英霊を隠匿せし洞。

異界きおくの経験。

並行世界を束ねる縁。

天の逆手。

そして人が無力なまま、その存在の在り方のみで以って神を凌辱し殺害し得る可能性。  
必要は揃い、未来は紡がれる。

「あなたの祟り、私が引き受けようか？」

「そうしたら、友奈ちゃんはどうかなの………?」

高嶋友奈は沈黙し、ただ結城友奈を見つめる。

「未来を生きてるあなたが苦しむことなんてない」

それが答えだった。誰も自分自身から逃れることなどできはしない。

「ありがとう……めっちゃめっちゃ嬉しいよ……」

……でも……でもね……誰かに押し付けるなんて、その方が辛い……」

「……やっぱり私なんだね」

たとえそれが、自身も周りも苦しめると分かっているとしても性分は変えられない。

「他の誰かが苦しむことが一番……」「つらいよ……」

それがたとえ、自縄自縛で首を吊ることだとしても己の本性には逆らえない。

「これから頑張れる？」

「頑張れないと思う……でも、こうするしかできないよ、私……」

「できないよね……」

「崇りのこと話せてよかった……来てよかった……」

結城友奈は生きることを諦めた。

結城友奈は己が死んでしまうことよりも、己が死なないために世界が地獄に変貌するこ

とを恐れた。

結城友奈は他者の苦しみを己の苦しみにしてしまふ人間だった。

高嶋友奈は他者の苦しみが己を苦しめる、そういう人間だった。

故に彼女たちにとって、個人としての苦しみよりも他者から無制限に供給され続ける苦しみが耐え難いのは当然で、故に苦しみの供給源を絶つべく他者の苦しみを摘み取ろうと考えることは必定で、彼女たちは神も使命も関係なく彼女たちの選択肢は彼女たち自身によって初めから定められていた。

友奈が友奈として生きる限り彼女の選択は自決しか残されていない。

彼女たちの適性の高さも、その不自由な精神構造が神が神であるために理であるために負っている不自由げんかくさと近似であるためなのだろう。

自分が自分であるための苦しみを背負い、それでも望んで死ねないならば、そんな奴は生きるべきだろう。しかしそんな御前が自分が自分で在り続けるために望まぬ死を選ぶというのなら私たちが代わりに死んでやる。自殺の大義名分のために利用して死んでやる。私たちに御前の代わりなど務まるわけがない。それでも共に生きることとはできないのだ

